

見慣れているはずの本棚に、また、知らない本があった。

二日酔いで痛む頭をさすりながら、昨日の記憶を思い出してみる。いつもの五人で飲みに行つて、一軒目はお馴染みの『大和屋』、二軒目は『シーサイド』、その時点で酔いは相当回つていて、それでたしか磯村と俺んちに帰る途中で：

「お前の奇妙な酒癖が出たな」

隣を見ると、アルコールを諸に食らつている腫れぼったい臉の磯村が、布団からむくりと起き上がつていた。

「俺、また、本買ってたのか？」

「うん。買ってたよ買ってたよ」

こめかみを抑えていた手を広げて、顔全体を覆う。

最近の俺は、酔っ払うと本を買うらしい。

我ながら奇妙な酒癖だと思う。自慢話をやけにしたがるとか、性欲が高まるとか、眠くなるとか、甘いものを無性に食べたくなるとか、そういう酒癖がこんなにも羨ましくなるだなんて思わなかった。大して本が好きなのでもないのに、アルコールに支配された無意識下の俺に本を買わされることの気持ち悪さつたらない。

本棚に手を伸ばし、記憶外の見知らぬ一冊を手取る。

「またこいつかよ」

それでいて、俺の買わされている本は決まってこの作者。

—海岸太郎。

こいつのことは何も知らないが、俺はこいつが嫌いだ。俺のなけなしの給料の幾らかはこいつに吸い取られているし、この舐め腐つたようなネーミングセンスにも吐き気がする。

「たまには読んでみれば？ 面白そうじゃん」

「嫌だ。本当に興味がない」

磯村に勧められようとも好奇心は微動だにしない。

表紙には『アスパラガス殺人事件』と記されていて、そのタイトルの下には、怪しげな雰囲気を纏つた紫色のアスパラガスが館の上で漂っている。

この海岸太郎という作者は、いつもこういった、どこかふざけているようなタイトルのミステリー小説を書いている。この時点で気に入らない。私情を挟んでないのかと言われれば嘘にはなるが、昨今のミステリー小説の軽々しさを嫌っている面があることは本当だ。

「そもそもさ、俺が本屋に行こうとしてたら止めてくれよ」

俺は掠れている喉で、磯村に向かって嘆く。

「無理だよ。こっちだって酔ってるし、なんなら俺は本が好きだし」

「ああ、そういえばナントカ研究会に入ってたもんな」

「小説研究会ね」

年間、百冊以上は読むという磯村は無類の本好きだ。酔っ払った俺はそんな磯村の影響を受けているのかもしれないが、まったく想像がつかない。年間で、良くても三冊程度しか読まない俺がそう簡単に流されるとは、到底思えない。

「本当に買った記憶が無いんだよな」

無駄に厚い海岸太郎の小説の重みを感じながら、俺はソファに腰かける。

「よく思い出してみなよ。絶対、本屋に寄ってるって」

「まあ、断片はあるんだよな。那賀ブックセンターだろう？」

俺がよく飲んでいる『大和屋』と『シーサイド』の近くには、深夜まで営業している那賀ブックセンターという本屋がある。店内の景色や雰囲気は一切覚えていないが、たしかにそのそばを通った記憶の断片はあるし、自動ドアをくぐりぬけた際の冷風の肌感覚もうっすらと記憶がある。

そう、うっすらだし、断片だ。

でも、あるだけで否定できない。

むず痒いこの昼間を、俺は一体、何度繰り返せば気が済むのだろう。

「海岸太郎、もう十冊も溜まってるじゃん」

本棚の前から告げられた磯村のその数字で、体が重くなる。なんて愚かで滑稽な十冊なのだろう。心なしか、ソファに沈んでいた尻が深く潜り込んでいく気がする。

メルカリで売ろうかな、売れねえかな、海岸太郎じゃ。売れても安いだろうしな。梱包の手間も発送の手間もうつとういしいし、誰か買いに来ねえかな。来ねえよな。

脳内でぶつくさ無生産な文句を垂れている俺の視界では、大したラインナップでもない俺の本棚に夢中な磯村の背中がある。

それはあまりに頼もしい背中で、ふと疑問が浮かぶ。

「なあ磯村。お前は、海岸太郎読んだことあるのか」

「え？」

振り返った磯村は、なぜか笑っていた。

「もちろんある。ある。面白かったよ。きつと気に入るよ、気に入る、面白いよ」

「…ああ、うん」

「上質なミステリーだと思うよ。登場人物にも魅力があるし、展開も目まぐるしいし」

「…そう」

「とにかく一度くらいは読んで方が良いよ。こうして本棚にあるっていうこと自体が運命だとも言えるしさ。まさにほら、それなんかおススメだよ」

磯村の視線は、俺の抱える『アスパラガス殺人事件』を刺していた。

「ふざけたタイトルだからって舐めない方が良いよ。きつと衝撃を受ける。何の賞も取ってはないけど、将来、ミステリー界を担う一人になるんだ」

本好きの性が疼いたのだろうか。磯村はずっとどこでもない空間に目をやりながら、言葉とセットで唾液を散らしている。軽はずみに聞いたことを後悔しながら、表紙の、紫色のアスパラガスをそれとなく指でなぞる。

「読んでみなよ。今」

「今？」

「うん、今。ここしかないでしょタイピング」

ソファに沈んでいた尻が、また深くなる。

俺を見る磯村の目は妙に血走っているように見えて、逃げられないような気がした。

「じゃあ、まあ、うん」

渋りながらも了承してみせると、

「楽しみ、楽しみ」

磯村は上の歯も下の歯も全部見せて笑っていた。

およそ二時間。俺は二日酔いの頭を支えながら、磯村の圧を受けながら、見事に『アスパラガス殺人事件』を読み切った。

最後のページをめくり、

「あー」

と、全てから解放された声を、出す。

すると寝転がっていた磯村が体を跳ねさせ、俺の前に笑顔で立ちはだかった。

「どうだった？」

その自信満々な表情と声色に、俺はこの二時間に対するとてつもない後悔と、怒りを覚えた。勧めてくれた友人に言うべきではないと分かっているが、本好きの磯村なら理解してくれるはず、と、俺は粘ついた口をゆっくりと開いた。

「いやー、面白くなかったな」

目の前の磯村は、きよとん、と目を丸めている。

「アスパラガスが全然生きてなかったな、話題と印象のために使ったとしか思えない。なのに、肝心の殺人事件の面白みも少なかった。まあ読書量の少ない俺が言えたことじゃないんだけどな。でもこういう一般人が楽しめるものにもなっていないっていうか、中途半端っていうか、これじゃ誰にも刺さらぬ。正直、嫌いだった。残り九冊は死んでも読まないね」粘っていた口内も気付けば爽やかに、俺は言い切ることができて清々しかった。

海岸太郎の作品を一冊読んだことで、俺は、海岸太郎を心の底から嫌うことができると思った。面白んじゃないか、といった憎き可能性の残っていた未読の今までは違う。ここまで面白くないという印象が刻まれば、酔いの回った無意識下でも海岸太郎を選ぶことはきつとないだろう。つまり、たったの二時間で万事解決したとも言える。

「本当、なんで海岸太郎なんか手に取ってたんだろうな」

ソファから立ち上がり、凝り固まった背中を伸ばす。

「酒は怖いな。全くよ」

そうやって俺はリビングを出てトイレに向かった。

廊下の冷えた空気を浴びながら、海岸太郎は面白くなかったけど読書ってのはいいもんだな。あの没頭感にはたしかに魅力がある。磯村の審美眼はもう信用できないけど、ネットで話題の小説なんかはポチってみてもいい。さっそく見てみようか。

ぶつくさ脳内でつぶやいて、トイレのノブを握る。

その瞬間。

後頭部に痛みが走った。

二日酔いの痛みじゃないことはすぐに分かった。何か硬い、どこか四角いようなもので、後頭部を大きく叩かれた。

俺はその場になすすべなく倒れ込み、遠のく意識の中で目を無理やりに見開く。

そこには、紫色のアスパラガスが揺れていた。

「ふざけるな」

耳を刺激しているその声は間違いなく磯村のものだった。

妙にだるい身体を持ち上げると、後頭部の熱を感じた。磯村の声と繰り返される鈍痛の、記憶の断片がゆるりと脳内に浮かび上がる。しかしそれを本能が否定したがっている。あれは二度寝の恐ろしい悪夢だった。俺はまだ酔っていた。小説の世界にのめり込んでいた。くだらない可能性にしがみつきながら、必死にリビングへと戻る。

そこには誰もいなかった。

でも、あった。

本棚に、また、俺の知らない本があった。

―新作だよ。

背後から、磯村の声が聞こえた気がした。

俺はずっと、本に記された「海岸太郎」の名前から目を離せずにいた。